



松北だより「笑顔」

第49号 平成28年12月 8日(木)

本年度の松ヶ江北小学校みんなの合言葉

【あいさつ・そうじ・時間のけじめ】

【やる気・本気・根気】

12月 怒らない、怒らない、… カチンと頭に來たら、

「1年生・2年生・3年生・4年生・5年生・6年生」と

指折り唱えて、いろんな友達顔を思い浮かべよう

— 今月のめあて、ちょっと長過ぎて、はみ出しちゃいました。 —

「あゆみ」の見方

第2学期の
～その2～

第48号の続きです。22日(木)の終業式の前に、できましたら19日(月)の学期末個人懇談会

までに、どうぞ一読ください。今回は、「各教科における観点別の学習の様子」における評価の在り方等について、再掲させていただきます。

「各教科における観点別の学習の様子」について (松北だより「笑顔」第23号の内容とほぼ同様です。)

ここでは、ほかの子と比べてではなく、一人一人の子が各教科の各観点について目標を達成しているかどうかを評価しています。「よい」とは、「中くらい」という意味ではなく、その学年として「おおむね目標を達成している」という意味です。決して「3段階評価の真ん中」という評価ではありません。「よい」は文字どおり「よい」なのです。

このような評価の仕方を、「目標に準拠した評価」と言います。《到達度評価》、《絶対評価》などと表現する場合もあります。各教科の観点別の学習状況を《目標に準拠した評価》で評価するのは、ここ20数年来の学校教育の流れです。

《目標に準拠した評価》が学習状況評価の中核を成すようになる前は、《集団に準拠した評価》が中心でした。《絶対評価》に対しての《相対評価》という表現の方が、馴染みがあるでしょうか。「クラス(集団)の中の、中程度の位置にある」という意味で以前に使われていた「5・4・3・2・1」という5段階評価の「3」や、「よい・ふつう・もう少し」という3段階評価の「ふつう」という評価は、まさに《集団に準拠した評価》、《相対評価》によるものです。《目標に準拠した評価》による現在の「あゆみ」における「よい」とは全く意味が違います。

《集団に準拠した評価》や《相対評価》の場合は、例えば「3」や「ふつう」を全体の〇%程度とするなど、予めその割合を定めておきますが、《目標に準拠した評価》の場合には、そのようなことはありません。結果としてクラス全員が「よい」以上という場合もあり、それを目指して指導をします。1学級(学年)の人数が極めて少ない本校のような場合だと、《集団に準拠した評価》や《相対評価》では、確かにあまり意味がありませんよね。

さらに、「よい」の中でも特に優れている項目を「たいへんよい」としますが、この評価方法の趣旨から、その割合は結果としてかなり抑えているということを最後に申し添えておきます。安易に「たいへんよい」の総数だけを数えて、お子様の学習状況全体を大雑把に、乱暴に評価することは、できればお控えください。また、「たいへんよい」が〇個以上あったら、〇〇をしてあげよう、買ってあげよう、といった動機付けの仕方を時々耳にすることがあります。そのような動機付けの在り方を一概に否定はいたしません、できれば、学習というのは本来、「知りたい、解決したいから学ぶ」という内発的な動機付けによってなされる方がよいはずですよ。

第48・49号と、文字ばかりになってしまいましたね。申し訳ありません。さあ、いよいよ学期末が近付いてまいりました。19日(月)の個人懇談会で、各学級担任と有意義なお話をさせていただけることを、心から願っております。

＜あとうき＞

昨日は、PTA給食試食会、学校保健委員会に多数ご参加いただき、誠にありがとうございました。先週の家庭教育学級でも感じたことですが、保護者同士が集まって一緒にお話をしたり、何かの活動に取り組んだりする機会って、本当に大切ですよ。

